

チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』 (2016) から読み解く日本のジェンダー問題

—躍進する韓国フェミニズムを手掛かりに—

宇都宮大学国際学部 丁 貴 連

宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士前期課程 萩 原 ののか

はじめに：韓国文学からの衝撃

2021年度日本のジェンダーギャップ指数は156ヶ国の120位を記録し、先進国では最下位となった。2011年（101位）以来、韓国など諸外国が具体的な対策と取り組みで男女格差を縮めているのに対し、日本は逆に順位を後退させている。

特に2018年は、東京医科大学の性差別入試問題、財政界での度重なる女性蔑視発言など、日本のジェンダーギャップ指数の低さを象徴するかのよう一連の問題が相次いで浮上した。まさにその年の暮れ、女だからという理由で家庭や学校、社会で受けてきた差別や困難を丹念に描きあげた『82年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房、2018年）が翻訳出版されたのである。

著者のチョ・ナムジュは、「日本の読者の皆さんへ」の中で本書を書いた理由を次のように述べている。

女として生きること。それに伴う挫折、疲労、恐怖感。とても平凡でよくあることだけけれど、本来は、それらを当然のことのように受け入れてしまっただけなのではないのです。そういう物語を書きたい、そこから『82年生まれ、キム・ジヨン』という小説は始まりました¹。

氏は、日常の「当たり前」に潜む女性差別を

「可視化」するために『82年生まれ、キム・ジヨン』を執筆したというが、その意図は予想を遥かに超え、韓国では130万（2020年時点）を超す大ヒット作となり、社会現象を巻き起こした。

日本でも2018年12月に発売と共に完売店が続出するなど、翻訳小説としては異例の記録を打ち立てたが、それよりも増して驚くのは、日本の読者の反応である。版元サイトに寄せられた読後の感想には、「当たり前だと思っていたことが、実は『性差別』だったんだ」という事実を突きつけられたことへの衝撃が数多く語られていた。

丁貴連は、日本が世界のジェンダー平等の流れから取り残されてしまった要因の一つに、「女に『わかまえる』ことを強いる日本社会の構造的ジェンダー不平等」があると次のように指摘している。

価値観のアップデートをしない男性たちは、わかまえる女性を厚遇する一方、意を唱える女性たちを黙らせた。その結果がジェンダーギャップ指数120位（2021年時点）なのである²。

（括弧は筆者）

確かに、未だに日本社会では「女の子だから」という理由でわかまえねばならぬことが多

1 チョ・ナムジュ著・斎藤真理子訳『82年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房、2018）171頁。以下頁のみ記す。

2 丁貴連「江戸女流文学とジェンダー、そして『わかまえる女』（上）—朝鮮朝女流文学『閨房歌辞』を手掛かりとして」（『宇都宮大学国際学部研究論集』第54号、2022年9月）52頁。

い。前述の東京医科大学性差別入試はその典型である。「価値観のアップデート」ができない日本社会を変えるためにはどうすべきか。筆者は、そのヒントの一つが、『82年生まれ、キム・ジョン』にあるように思う。

本書を読んだ読者は、まるで申し合わせたかのように、「わきまえているばかりでは日本のジェンダー観はいつまでも世界の恥でしかない」（丁、2022）という危機意識について語っていたからである。そこで本稿では、読者に向けて「覚醒せよ」と促した『82年生まれ、キム・ジョン』を手掛かりに、日本のジェンダー問題の現状と課題を浮き彫りにする。

II. 躍進する韓国フェミニズム

1. 三世代の女性と変わりゆく社会

本作品にはジョンとその母親、祖母の三世代の女性たちの姿が描かれ、そこには着実に男女平等へと歩んでいく韓国社会の変化を見て取ることができる。

ジョンの祖母、コ・スンブン氏が妻として、母として生きた時代は、戦争や貧困によって生きるだけでも精いっぱい時代であった。そんな彼女の夫は家事育児、扶養の意思さえも放棄した人物として描かれるが、コ・スンブン氏は夫を以下のように評価する。

それでも彼女は夫を恨まなかった。女遊びをせず、妻を殴らないだけでも大したものだ、これなら良い夫だと本気で思っていたのである。

(22頁、下線は筆者)

あまりにも偏った負担を担い、それを当然視するコ・スンブン氏の姿は、当時の女性の地位の低さを如実に映し出している。朝鮮時代に始まる儒教において、「男尊女卑」や「三従之道」の社会規範はとりわけ男女の権力関係、支

配構造を確固たるものとし、自己犠牲を惜しみなく払う女性像を求めた³。

現代以上に儒教思想の根強い時代を生きたコ・スンブン氏にとって、女性の地位を軽視した社会規範は疑いのない当たり前であり、絶対的価値観として嫁を苦しめてしまう。

四人も息子を産んだから、こうやって今、息子が用意してくれたあったかいご飯を食べ、あったかいオンドルでぬくぬくと寝られるんだ。息子は少なくとも四人はいなくちゃね。

(20-21頁、下線は筆者)

実際、必死に育てた息子のうち親孝行者は一人だけで、家事は全て嫁が行うにも関わらず、自身の幸福の所在をすべて「息子」にすり替えて解釈している。彼女が妻として、母として生きた1940年から50年代、未だ希薄な男女平等の概念の中で、非常に低い女性の地位がジョンの祖母の姿から見取れるのである。

それから約10年、ジョンの母、オ・ミスク氏が生まれた1960年から70年代頃は急激な女性の地位向上は見られないものの、女子教育にジェンダー的観点からの前進が描かれる。オ・ミスク氏の幼少期にあたる70年代には国民学校の入学率が男女ともに9割を超え、女子教育がスタートラインに立ったといえよう。

しかし、急速な産業化によって打撃を受けた彼女の実家では、教育の優先権は「男児」に与えられ、オ・ミスク氏とその姉は国民学校卒業後、工場で男兄弟の学費を賄う日々を過ごした。

眠気覚ましの薬を常用し、黄ばんだ顔をしても昼も夜も働いても、給料はお話にならない

3 李南錦『植民地朝鮮の「新女性」と母性イデオロギーへの問い—ナ・ヘソクの小説「瓊姫」と彼女の言説分析を通して—』（『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター』第9号、2006年）42頁。

ほど少ない。

(30頁)

当時、オ・ミスク氏のような農村出身女子の大半が中学進学を諦め、「清溪川」付近の工場へと就職した。しかし1970年、当時22歳だったチョン・テイル氏が労働環境の告発・改善を焼身自殺という極端な形で求めたほどに、その状況は非人道的な深刻さを抱えていた⁴。そんな劣悪な環境下で心身を酷使し、男兄弟の経済的支援に回される少女たちの思いとは、どうであったのか。

一家を盛り立てるのは男の子であり、それが一家全員の成功であり幸せだと考えられていた時代である。娘たちは喜んで男の兄弟を支えた。

(30頁、下線は筆者)

兄弟を支え、一家の成功の一端を担うことに心から誇りと喜びを感じていることが分かる。自己犠牲を払ってもなお、兄弟の優先的立場を肯定的に捉えている姿には、女性自身の男尊女卑意識の内面化、男女不平等な教育を正当化してしまう当時の家族観が見て取れる。

一方、「いつかは自分たちにも学ぶチャンスはやってくる」という期待をミスク氏と姉は同時に抱いていた。教育の権利を兄弟に譲っただけで、彼女たちは学びに決して無関心ではなかったのだ。

キム・ジヨン氏の母とその姉は、家族の囲いの中にいたら自分たちにはチャンスが回ってこないと気づいたのである。

(31頁、下線は筆者)

必死に支援した兄たちの経済的援助が、弟の大学進学に優先された時になってようやく、女子の教育が必要とされていない社会雰囲気と自身の置かれた立場を理解したのである。教師の夢が叶わなかった彼女の後悔は、母親になっても消え去ることはなかった。

お金を稼いで兄さんたちを学校に行かせなくちゃいけなかったから。みんなそうだったんだよ。あ那个时候の女の子は、みんなそうやってたの。

(31頁、下線は筆者)

「みんなそうだから」の多用は、後悔を振り払い、自身の境遇を正当化する為の自分への言い聞かせと解釈できよう。過去を振り返りながら拳を握りしめる彼女の姿には、女性であるが故に教育の権利を得られなかった憤怒や葛藤、後悔ばかりしている自身への不甲斐なさが表れている。

それでも、工場勤務の傍ら夜間中学に通い、高卒資格を取得したその能動的な女性の姿は遅く、女子の教育を無用としてきた儒教社会において、女性自身が学業を期待できる時代になった、という肯定的な変化として読み取れる。

そんなオ・ミスク氏の時代から更に約20年後、1982年生まれの子キム・ジヨン氏が生きる韓国社会は男女平等へと飛躍的な変化を見せていく。

女の子も男の子と同じように適性について悩み、社会人としての未来を計画し、それに近づくために努力し、競争していた。

(67頁)

民主化を終えた80年代以降、女子の高校進学率は急増し、90年代になると女性運動主導の男女平等を目指した法整備が着実に整えられ、女

4 倉持和雄「韓国社会の光と影—韓国社会のひとつの見方」(『横浜市立大学論叢・社会科学系列』第65巻1・2・3合併号、2014年)35-37頁。

性の地位向上へと繋がっていく。制度的変化に伴い、男女平等意識も高まりゆく社会の中で学生時代を過ごしたキム・ジョン氏も、当たり前のように大学へ進学し、社会人となる姿が描かれる。

最近の国民学校では女子の学級委員がすごく多いんだって。四〇パーセント以上だっ
よ。ユニョンやジョンが大きくなるころには
女の大統領が出てくるかもね。

(42頁、下線は筆者)

韓国社会の財政界における女性進出は2000年代に入るとさらに勢いを増し、女性初の大統領誕生やクオータ制の導入が行われた。女子の学級委員や女性課長など、キム・ジョン氏の周囲に登場する女性のロールモデルの多さは、現実社会の変化をリアルに反映しているのがあった。

転々とパートタイムや内職を務めるオ・ミスク氏に対し、広告企業で正社員として働くキム・ジョン氏の姿からも、女性の就業形態をめぐる社会進出の変化が見て取れる。

また、家事を積極的に行い、妻の負担を常に気に掛けるキム・ジョン氏の夫の姿は、コ・スンブン氏の夫とは対照的に描かれている。不均衡な権力関係にあった夫婦関係も、比較的男女平等の学生時代を過ごした若者を中心に、対等な関係性へと変化していることがキム・ジョン夫妻から読み取れるのであった。

以上、着実に男女平等へと変わりゆく韓国社会を三世代の女性の姿から確認してきた。キム・ジョン氏の時代の躍進的な女性の地位向上は、90年代以降の急速な法整備と、女性独自の問題を訴え続けてきた女性運動団体の存在が大きな鍵といえよう。

しかし、数百年も強固に残存してきた儒教思想に基づく人々の価値観はそう簡単には変わらない。それは社会に出たキム・ジョン氏が幾度

となく直面する性差別として登場するのであるが、そんな娘を守ろうとするオ・ミスク氏の姿には、フェミニズムの躍進する韓国女性ならではの母親像が映し出されているのであった。

2. 性差別に立ち向かう母の姿

前述したように、オ・ミスク氏は教師という夢を抱きながらも、女兒であることを理由に教育機会を奪われてしまう。その時に感じた悔恨や憤怒、葛藤は「娘には同じ思いはさせまい」という強い意志で性差別に立ち向かう母親の姿として描かれる。

最も象徴的な描写は、キム・ジョン氏が就職先の見つからない不安や、やるせなさから大学の卒業式を休もうとし、父親に怒鳴られる以下の場面に挙げられる。

父親：

おまえはこのままおとなしくうちにいて、嫁にでも行け。

母親：

いったい今が何時代だと思って、そんな腐りきったこと言ってんの？ジョンはおとなしく、するな！元気出せ！騒げ！
出歩け！わかった？

(98頁、下線は筆者)

娘の経済的安定や幸福を勝手に「結婚」と結びつける夫を怒鳴りつけ、父親の言葉を真に受けてショックを受ける娘に喝を入れている。自分事のように声を荒げる彼女の姿は、問題を冷静沈着に解決し、家族を諭すそれまでの姿とは対比的である。

そこには、時代から時代へと受け継がれてきた性差別的な社会のなかで、自身も犠牲となってきた連鎖を娘の時代に断ち切ろうとする彼女の思いの強さが表れている。以下の場面においても、彼女の娘への特別な思いが映し出されている。

父と祖母は、今まで通り女の子たちと祖母が一部屋を使い、男の子は独立した部屋を使うべきではないかと言ったが、母は断固たる態度をとった。 (44頁、下線は筆者)

儒教思想の「長幼の序」に基づいた厳格な上下関係において、嫁が姑に反抗することは容易ではない中、彼女は娘のこととなると決して譲らない姿を見せる。それは男児として祖母からの独占的な寵愛を受け、あらゆる場面で優遇される息子とそれを譲る娘の姿を、かつての自身の姿と重ねている。性差別への当然意識を持ってほしくない、という母親としての思いは、女性としての連帯意識のようにも捉えられる。

しかし、どれだけ性差別に反対する姿勢を見せる彼女も、男尊女卑社会を幼少期から過ごしてきたことによる古い価値観は、そう簡単には拭いきれなかった。

先々のことを考えてごらん。女の職業として、先生ほど良い仕事はないんだよ。
(64頁)

女性が社会に出ることの厳しさを、彼女は身を持って経験していたからこそ、娘の幸せを心から願った提案であったことは違いない。しかし、彼女に潜む性役割分業意識の存在と、自身と同じ思いを娘にさせてしまう危うさに無自覚な様子が垣間見える。

そうだね、母さんが間違ってた。変なこと言っちゃったね。小論文、頑張りなさい。
(66頁)

それでも、娘に性差別的であることを指摘された彼女が自身の固定観念の存在を認める姿勢は、丁貴連が言う「価値観のアップデート」を体現しているといえる。

1990年代を中心に法整備や女性運動によって躍進する韓国フェミニズムの一方で、女性嫌悪や男女間の溝などの新たな問題も浮上している韓国社会であるが、オ・ミスク氏のように自身の価値観を更新しながら、「自身と同じ思いをさせまい」と性差別に声をあげるフェミニスト的な母親の姿は、ジェンダー平等を目指す社会で生きるすべての人々に求められる姿であろう。

Ⅲ. 変わらない日本の「当たり前」

1. 地方女子のジェンダートラック

前章で明らかにしたように、韓国の女子教育は時代を経るごとに一般化し、2009年には女子の大学進学率が82.4%と、男子を越えるほどの変化を遂げていった⁵。『82年生まれ、キム・ジヨン』においても、1990年代後半に大学受験を迎えたキム・ジヨン氏や姉の大学進学を反対する大人は一切登場しない。

ある程度大きくなってから両親に言われたお小言は、大きく分けて二種類である。まず生活習慣や態度に関することだ。(中略)そして、二番目は、勉強しろということ。
(65頁、下線と括弧は筆者)

オ・ミスク氏の子どもの時代であれば、「勉強」の言葉は息子にだけ向けられていた。だが、IMF危機の打撃で大学費用を心配し始めたキム・ジヨン氏を見て、「受かってから心配しな」と娘の背中を押す母親の姿が描かれるように、韓国社会では「女だから」という理由で高等教育の権利を奪われるようなことは、既に過去のことに過ぎなかった。

では、日本はどうであろうか。『82年生まれ、キム・ジヨン』が日本で出版された2018年、『朝日新聞』(2018年10月10日付)が報道

5 「大学進学率の男女差広がる 女子75%・男子68%＝韓国」(『聯合ニュース』2015年3月19日付)。

した以下の内容は、日本のジェンダートラック問題を考える上で示唆に富む。

大学全入時代と言われる今も、地方などでは「娘は無理して大学に行かせなくても…」といった考えが根強くあるとされる。(中略)茨城県出身。大学進学時、祖父に「女が大学なんて」と言われた。「社会の主人公は男性なんだと思った。性別は選べないのに、『女のくせに』って言わないでほしい⁶」

(下線は筆者)

「女が大学なんて」と語る祖父の言葉は、「女性は学歴を積んで職を得たとしても、結婚や出産を機に、結局は家庭へおさまる」という性別役割分業に基づいた価値観を端的に映し出している。地方女子の短期大学への進学率が高い背景にも⁷、「女は家庭」という女性のライフコースを前提とした意識が親世代、とりわけ男性に根強くあるからだといえよう。



【図1】 話題となった「『女が大学なんて』言わせない」朝日新聞の記事⁸。

祖父に言われた一言で学生ながらにして、男性中心的な社会を悟った女子学生の存在は、決して地方では珍しくない。というのも、「女が大学なんて」の価値観は数字を見てみると、地方では「当たり前」として浸透しているからだ。

『朝日新聞』は同記事において、地方女子の大学進学率の低迷を、詳細な数値を踏まえて報道している。

大学進学率の男女差は年々縮まり、この春は女子の進学率が50.1%と初めて5割を超えた。ただ、女子が男子を上回ったのは2都県だけで、地域差も大きい⁹。

(下線は筆者)

女子の大学進学率が7割を超える東京都を筆頭に、都市部の都道府県では平均の5割を優に超えている一方、九州や東北などの「地方」では依然として4割にも満たない地域が多かったのだ。「娘には無理してまでも…」の考え方が地方で根強いことに触れられているが、平尾桂子氏が指摘する「親は、息子よりも娘に対して、教育投資額を縮小させる傾向¹⁰」は、一人暮らしなどの経済的負担の多い地方では強く作用し得るわけであり、娘の大学進学がより二次的なものとされていることが容易に想像できる。

つまり、2017年当時、9割近くの女子が四年制大学を希望していたにも関わらず¹¹、「行きたく」でも「行けない」背景には、「女が大学なんて」の「男子優先」の古い価値観が地方で

6 『朝日新聞』 「『女が大学なんて』、言わせない」 (『朝日新聞』2018年10月10日付) 2面。
7 久保哲朗「地方女子は進学しなくていい」風潮は本当かデータで読み解く「男女の大学進学率」の差」(『東洋経済ONLINE』2018年11月27日付)。
8 『朝日新聞』 (2018年10月10日付)。

9 『朝日新聞』 (2018年10月10日付)。
10 平尾桂子「教育投資とジェンダー格差」(武内清編『キャンパスライフと大学改革』上智大学出版部、2005年) 119-139頁。
11 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ第8回「2017年高校生と保護者の進路に関する意識調査」(2018年2月付) 24頁。

は2018年になってもなお、「当たり前」として存在していたのだ。

だが、2018年は先述の朝日新聞の報道に加え、東京医科大学をはじめとする大学入試性差別問題が露呈するなど¹²、想像もしえなかった教育における女性差別の実態に人々は驚き、憤りを見せた。身近な性差別の被害者、加害者としての感覚に敏感になったように思えたが、ジェンダートラック問題は果たしてどうなったのか。

結論から言うと、依然として、地方女子は古い価値観によって大学進学を閉ざされていたままであった。寺町晋也氏は、2021年の女子の四年制大学進学率は51.7%と5割を越えるも、「地方」と「性別」が足枷となっている現状を指摘すると同時に、以下のように述べている。

地方の女子が大学進学するためには「なんとなく」では周囲が納得しないだろうし、「大学で学ぶ意思」や「県外大学へ進学する明確な目的」といった「大義名分」が男子や大都市圏の女子よりも求められやすいだろう¹³。

(下線は筆者)

「大義名分」を求めなければならないほどに、娘の大学進学を価値を見出せない親の姿は、2018年の「娘は無理してまで大学に行かなくても…」の考え方から変わっていないことが分かる。「高校生と保護者の進路に関する意識調査2021年」によると、「家庭の経済事情が進路決定へ影響する」という項目は、息子71.8%に対し、娘は77.1%と、2017年からさらに男女

差は広がりを見せている¹⁴。むしろ、古い価値観は更新されるどころか、より強固になっているということも否めない現状にあるのだ。

教育の優先権が「男児」に与えられる様子は、『82年生まれ、キム・ジョン』で描かれる1970年代頃のオ・ミスク氏の姿と重なる。しかし、前章で明らかにしたように、韓国では教育における「男子優先」の価値観は、今日となつては既に過去のものに過ぎなくなった。その一方で、日本の地方では今日もその古い価値観は強固に残存し、『82年生まれ、キム・ジョン』に、以下のようなレビューが寄せられた。

高校の同級生たちから勧められた『82年生まれ、キム・ジョン』。同じ郷里で同じ時間を過ごしてきた友人たちの「田舎で親世代に根強く残る男尊女卑思想に高校生時代翻弄されたのを思い出した……」とのコメントに興味を惹かれ手に取った¹⁵。

『82年生まれ、キム・ジョン』を読み、当事者でありながらも忘れていた、自身のジェンダートラックの経験を思い出している。男尊女卑思想で娘の教育を制限した自身の親世代と、母親として娘の大学進学を熱心に支えるオ・ミスク氏の姿は、対照的に感じられたに違いない。

ジェンダーギャップ指数ランキングでは、政治経済分野ばかりに注目が集まり、教育分野の高等教育の項目は先進国の中で低水準のまま¹⁶。近年、女子の博士課程進学率でも著しい伸びを見せる韓国社会とは、高等教育において20年以上

12 「女性受験生への差別『人生変わった』東京医科大不正入試めぐり訴訟、9日に判決 原告『今も重い負担』」『東京新聞Web』(2022年9月9日付)。

13 寺町晋哉「大学進学における『地方』と『性別』の『足枷』」(『学術の動向』2022年10月号、日本学術協力財団)79頁。

14 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルート第10回「2021年 高校生と保護者の進路に関する意識調査」(2022年2月付)32頁。

15 「チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』」(『日本俳句教育研究会(nhkk) ブログページ』2021年7月10日付)。

16 WORLD ECONOMIC FORUM「Global Gender Gap Report 2021」(2021年)233頁。

もの遅れを見せていることになる¹⁷。意思決定を行う場の女性の少なさが問題視され始めた日本社会において、ジェンダートラック問題という教育の男女格差はあってはならず、その背景に潜む「男子優先」の古い価値観のアップデートの必要性を『82年生まれ、キム・ジヨン』が浮き彫りにしたのである。

2. 声をあげる女性を黙らせる圧力

日常のリアルな性差別と女性の苦痛が淡々と描かれる『82年生まれ、キム・ジヨン』であるが、性差別に「声をあげる」女性たちの描写も印象深い。例えば、男子優先で給食が配膳されるにも関わらず、女子生徒に「早く食べる」と急き立てる教師に対して、一人の女子生徒は以下のように抗議した。

「給食を食べる順番を変えるべきだと思います」（中略）小さな達成感を感じた。不当だと思うことについて、絶対権力者に抗議して変えさせたのだから。（40-41頁）

小学生にとっての教師の存在は、そう簡単に反論できる相手ではない。それでも、不公平な状況に異を唱える彼女の姿は力強く、女子生徒同士の連帯感と自信を形成した出来事として描かれている。また、キム・ジヨン氏の元職場で発覚した女子トイレ盗撮事件に「声をあげる」女性社員たちも登場し、事件の隠蔽を目論む社長に対し、女性課長は以下のように述べた。

家庭があることも両親がいることも、そんなしわぎを許す理由ではなく、そんなことをしてはいけない理由ですよ。社長の考えから変えていただかないと。そんな価値観でず

と社会を渡っていったら、今回は運よく逃げきれても、似たようなことがまた起きます。

（150頁、下線は筆者）

精神的な不安を抱えながらも、権力者に対して冷静に間違いを指摘する彼女の姿からは、断固として加害者を許さない意思と同時に、次なる被害を防ごうとする決意と責任感が伝わってくる。

このような「声をあげる」女性の存在は物語のなかだけに留まらないものとなった。2018年1月、韓国 の #MeToo運動の第一号者として、検事のソ・ジヒョン氏が、検察庁内部の性被害を暴露したのだ。しかも彼女の #MeToo 告発は、JTBC の生放送を通して行われた¹⁸。瞬く間に多くの国民が彼女の告発を目にし、声を震わせながら生放送で語られる様子に事の深刻さが伝わった瞬間である。彼女の勇気ある告発は、財政界を始めとし、芸術や教育分野など、ありとあらゆる業界で「泣き寝入り」してしまっていた女性たちの声を表へと導いたのであった¹⁹。

JTBC による #MeToo 関連の生放送は、ソ・ジヒョン氏の2018年1月29日を筆頭に、同年3月5日にかけて12回も行われ、文学界における性暴力傍観の実態を暴露したチェ・ヨンミ氏や、演劇界の性暴力を告発したオム・ジヨン氏などが登場した²⁰。その後も、様々なメディアが長期的に #MeToo 運動を大きく取り上げ続けたことで、国民の関心は下火になることなく、「声」は連鎖していったといえよう。同年6月、恵化駅で行われた「#MeToo」に関する

18 李美淑「『殻』を破ろうとする韓国の女性たち—消される『声』に抗して」（林香里編『足をとがしてくれませんか。』亜紀書房、2019年）248頁。

19 嚴廷美「韓国におけるMe Too運動」（『エコノフォーラム21：学生と教職員のインターコミュニケーション誌』25号、2019年3月）21頁。

20 李美淑（2019）251頁。

17 小川眞里子・横山美和・河野銀子・財部香枝・大坪久子「東アジアの女性学生・研究者の専攻分野に関するジェンダー分析—EU・日本・韓国・台湾の比較をとおして」（『人文論叢』三重大学32号、2015年3月）17頁。

デモが約2万人規模にまで拡大するなど²¹、一人の女性の勇気はもちろん、韓国メディアの「声」を拾い上げる姿勢が、#MeToo運動を躍進させたのであった。



【図2】2018年2月25日、ソウル恵化洞マロニエ公演前で開かれた#MeToo運動集会に集まった女性たち²²

実は、日本では『82年生まれ、キム・ジョン』の日本出版よりも早くに「声をあげた」女性がいた。2017年、飲酒で記憶を失った後、元TBSワシントン支局長によって受けた性被害を告発した伊藤詩織氏である。彼女は4年もの長い裁判を経て、2022年ようやく勝訴に至った²³。しかし、彼女のあげた声には、想定外の凄まじい誹謗中傷が向けられることとなった。Twitter上で彼女に向けられた21万件の投稿の内、批判的かつ名誉棄損にあたる内容は約15%にも上ったのだ²⁴。

最も多かったとみられる内容は、「ハニートラップだ、枕営業だ²⁵」と、冤罪と決めつけた上で加害者を擁護する声、「なぜ抵抗しなかつ

たのか、逃げなかったのか²⁶」と、男女の身体的な力関係の事実を無視してまでも、被害女性に問題を見出そうとする抑圧的な雰囲気ネット上に溢れた。

中には女性によるものも見られ、「枕営業大失敗」という言葉と共に、伊藤詩織氏を彷彿とさせるイラストを掲載した漫画家や²⁷、「相手をレイプ魔呼ばわりする卑怯者」と中傷したツイートに「いいね」を押す政治家²⁸も現れるなど、勇気を出してあげた「声」はなぜか批判的となり、日本を離れざるを得ないほどの二次被害に苦しめられる。

後の2019年には、職場でのパンプスやヒールの強制に対する性差別的な不平等の実態への抗議運動「#Ku too」を行った石川優実氏にも、人権侵害甚だしいバッシングや、自殺を煽る脅迫さえも寄せられた²⁹。結局、韓国よりもいち早く「声をあげた」にも関わらず、#MeToo運動の盛り上がりは欠けてしまい、声をあげる女性を「黙らせよう」とする日本社会の圧力ばかりが目立ったのだ。

これに対して、李美淑氏は韓国メディアが#MeToo運動をメディア自身のアジェンダとし、ライブインタビューを通じて、消され続けてきた「声」に場を提供したことが、日本の#MeToo運動との決定的な違いであると指摘する³⁰。以下の、JTBCの調査報道チームによる言葉が、非常に印象深い。

法廷、司法システムから保護されない人々

21 チェ・ミニョン、イム・ジェウ、ソン・ダムン「『私の日常はあなたのポルノじゃない』…“Me Too”ろうそく”へと広がる恵化駅デモ」(『ハンギョレ』(2018年6月11日付))。
22 『BBC NEWS KOREA』(2018年2月27日付)。
23 根岸拓朗「伊藤詩織さんの性被害、元TBS記者への賠償命令が確定 最高裁決定」(『朝日新聞デジタル』2022年7月11日付)。
24 安田業津紀・佐藤慧「取材レポート：伊藤詩織さんの記者会見からネット上での誹謗中傷について考える一言を凶器にしないための『Rethink』を」(『Dialogue for People』(2020年6月10日付))。
25 新屋絵理「『暴力的な言葉拡散、恐ろしい』伊藤詩織さんが意見陳述」(『朝日新聞デジタル』2020年10月21日付)。

26 「伊藤詩織さん中傷ツイートに繰り返し『いいね』…自民・杉田水脈氏に2審は55万円の賠償命令」(『読売新聞オンライン』2022年10月20日付)。
27 「はすみとしこさんに賠償命令 ツイッター投稿で伊藤詩織さんへの名誉毀損認める 東京高裁」(『東京新聞web』2022年11月10日付)。
28 「中傷ツイートに『いいね』 杉田水脈衆議院議員に賠償命令 東京高裁 伊藤詩織さん側敗訴の地裁判決を変更」(『東京新聞web』2022年10月20日付)。
29 竹下郁子「グラビア女優には人権ないの？ 声上げる女性の過酷な現実。#KuToo で退職へ」(『BUSINESS INSIDER』2019年6月21日付)。
30 李美淑 (2019) 251頁。

が存在し、増え続けるのであれば、ジャーナリズムはその司法システムの不正義を知らせることに存在の意味があるのです³¹。

(下線は筆者)

メディアとしての真実を追求する強い使命感と被害者への寄り添う姿勢は、日本のメディアを受容する筆者にとっては実に新鮮に感じられた。『82年生まれ、キム・ジヨン』も法整備が進みながらも、変わらずに潜んでいた意識的な性差別の事実を社会へ訴えかける、という明確な意図の中で誕生した作品だ。メディアをはじめとする、「声をあげる」女性をバックアップする環境づくりが、韓国では様々な報道機関によって、既に当然の如く行われている。

一方で、「声をあげる女性」に対する日本メディアの姿勢はどうであるか。李美淑氏が「マスメディアの報道では、事件そのものではなく、主に『#MeToo、なぜ日本では広がらないのか』といった類の報道や分析記事が目立っていた³²」と述べるように、伊藤詩織氏の事件の詳細や被害の深刻さを真正面から報道したものは実に少なかった。伊藤詩織氏は、小酒部さやか氏とのインタビューで以下のように語る。

よく「勇気がある」と言われますが、今の行動（『Black Box³³』の出版）に至ったのは、色々と試した結果、この問題を訴える上で他に道がなかったからです³⁴。

(括弧、下線は筆者)

彼女が記者会見後に、性被害の事実を忠実に綴った自著『Black Box』を出版したのは、声

を届ける「方法がなかった」からだ。司法システムやメディアへの頼みの綱がなかったからこそ、伊藤詩織氏も石川優美氏も本を通して、「声をあげる」しかなかった。ここに、韓国メディアの性被害告発に対する積極的な報道姿勢との違いが浮き彫りになるのであった。

フェミニズムを牽引した『82年生まれ、キム・ジヨン』には、読者に「声をあげる」勇気を鼓舞するかのような、抗議する女性たちが時折登場する。「わきまえる」ことを求められてきた日本でも、声をあげ始めた女性たちの姿には希望が感じられる一方、あらゆる場面で女性の声を必要としながら、加害性を認識できずに「声」を妨げる古い価値観、そして、「声をあげよう」と思えるメディアの報道姿勢のアップデートが必要になっている。

おわりに：『82年生まれ、キム・ジヨン』がおもたしたもの

これまで、『82年生まれ、キム・ジヨン』を手掛かりに、日韓の差異に着目して日本のジェンダー問題を浮き彫りにしてきた。

その一つは、大学全入時代とも称される現代において、依然として存在する地方女子のジェンダートラック問題である。女性の教育が祖母からジヨンの時代へと着実に一般化していった韓国に対し、今日に至っても地方では教育の自由を奪われている女子が存在している日本の問題が見えてきた。娘や孫に向かって、「女が大学なんて」と言う父親や祖父の姿は、性別役割分業に基づいた女性のライフコースを前提とした、古い価値観のままの男性の姿を強固に映し出している。進学したくてもできない背景に、性差別的な要因が存在していることに、今以上に焦点を向け、問題視すべきではないか。

また、もう一つの深刻なジェンダー問題が「わきまえる」の価値観である。「声をあげた」女性に向けられる過激的な言葉の暴力は二

31 李美淑 (2019) 255頁。

32 李美淑 (2019) 246頁。

33 伊藤詩織『Black Box』(文藝春秋、2017年)。

34 小酒部さやか「『もし被害が妹だったら…と想像すると声を上げずいられたかった』詩織さんが語る被害を表沙汰にした理由」(『YAHOO JAPAN/ニュース』2018年3月7日付)。

次被害へと繋がり、意思決定の場における女性の声を求めながらも、裏では物申すことを許されない雰囲気をつくりだしていた家父長的な古い価値観が、日本では今日も当然のように存在していた。加えて、「声をあげる」女性に対する日本メディアの他人事な姿勢は、フェミニズム運動の盛り上がらない日本社会の一要因となっている側面も露呈したのであった。

ただ、『82年生まれ、キム・ジョン』でも描かれているように、「女が教育なんて」、「女はわきまえろ」といった古い価値観は、儒教思想の強い韓国社会では日本以上に「当たり前」にあった。しかし、日本との決定的な違いは、意識的な部分で着実に変化していることである。オ・ミスク氏は自身に内面化された古い価値観に葛藤しながらも、「娘には同じ思いはさせまい」とジェンダーバイアスを克服していく。また、理不尽な性差別に怒りを露わにし、「わきまえない女」となって、声を上げて抗議する女性たちの描写は、現実社会の#MeToo運動のエンパワメントとして作用したのは明らかであり、本作品を読んだ男性たちの意識的な変化も起きている。

以下は、キム・ジョン夫婦が子育ての話し合いを行う場面であるが、ここに男性読者に潜む無意識への強烈な問いかけが行われている。

夫：

子ども一人、持とうよ。(中略) 僕もちゃんと手伝うからさ。(中略) 失うものことばかり心配しないで。

ジョン：

失うものことばかり考えるなって言うけれど、私は今の若さも、健康も、職場や同僚や友だちっている社会的ネットワークも、今までの計画も、全部失うかもしれないだよ。

(中略) だけど、あなたは何を失うの？

(127-129頁、下線は筆者)

妊娠後の家事育児や仕事との両立への不安、出産前から預け先を考えてしまう罪悪感を抱くキム・ジョン氏に対し、子を持つことへの喜びに溢れ、子育てへの不安は一切見せない夫の姿が実に対照的に描かれている。この違いこそが男女の子育てに対する価値観の差異の実態であり、言い換えれば、男性たちは妊娠出産や子育てで不安を抱かなくてよいほどに、女性がすべてを担い、すべてを失っていた現実を見事に暴き出した。

本場面は、韓国社会の男性たちが子育てを行う女性側の立場を認識する重要な描写となったに違いない。例えば、男性の育休取得率は2010年の2.0%から、2021年には26.3%と上昇し、現在は日本の倍近く的位置まで前進した³⁵。家事育児負担率の男女比も縮小傾向にあるなど、女性が「失うもの」を深刻に受け止めている男性が多いことは数値にも如実に表れているのであった。

一方で、日本の男性たちはどうであろうか。

『82年生まれ、キム・ジョン』を読んだ男性読者たちは、「男性こそが読むべきだ」と言うが、男性育休取得率は伸び悩みを見せ、家事育児の夫婦の負担率に大幅な改善も見られない。「当たり前」の古い価値観から依然として、抜け出せずにいるようだ。

以上のように見てくると、『82年生まれ、キム・ジョン』は法整備だけでは社会が変わらないことを認識させてくれた。日本社会が古い価値観をアップデートできずにいた結果が、今日のジェンダーギャップ指数146カ国中116位(2022年)であり、今後どのような行動をとるべきかのヒントを与えてくれたのだ。

『82年生まれ、キム・ジョン』を筆頭に隆盛する韓国フェミニズムの刺激を受けた今、私た

35 朴琴順「『育休取得、4人に1人が男性』の韓国 その理由は? 日本と共通の課題も」(『朝日新聞GLOBE+』2021年11月26日付)

ちは「わきまえる」ことをやめ、連帯の「声」を上げていかねばならない時を迎えている。

参考文献

- ・浅井春夫・良香織・鶴田敦子（2018）『性教育はどうして必要なんだろう？—包括的性教育を進めるための50のQ&A』大月書店
- ・雨宮処凛（2018）『「女子」という呪い』集英社
- ・伊藤詩織（2017）『Black Box』文藝春秋
- ・石井優美（2019）『#KuToo靴から考える本気のフェミニズム』現代書館
- ・井上輝子（2021）『日本のフェミニズム—150年の人と思想』有斐閣
- ・イ・ミンギョン著／すみみ・小山内園子訳（2018）『私たちにはことばが必要だ—フェミニストは黙らない』タバックス
- ・岩田正美・大沢真知子（2015）『なぜ女性は仕事を辞めるのか—5155人の軌跡から読み解く』青弓社
- ・上野千鶴子・宮台真司・斎藤環・小谷真理（2006）『バックラッシュ! なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』双風舎
- ・上野千鶴子（2010）『女ざらい—ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店
- ・萩野美穂（2014）『女のからだ—フェミニズム以後』岩波書店
- ・韓国女性ホットライン連合編集・山下英愛訳（2004）『韓国女性人権運動史』明石書店
- ・坂爪真吾（2020）『「許せない」がやめられない SNSで蔓延する「#怒りの快樂」依存症』徳間書店
- ・心理科学研究会ジェンダー部会（2021）『女性の生きづらさとジェンダー「片隅」の言葉と向き合う心理学』有斐閣
- ・石橋『ジェンダー・バックラッシュとは何だったのか—史的総括と未来へ向けて』（インパクト出版会
- ・治部れんげ（2020）『「男女格差後進国」の衝撃—無意識のジェンダーバイアスを克服する』小学館
- ・チョ・ナムジュ著／すみみ・小山内園子訳（2020）『彼女の名前は』筑摩書房
- ・チョ・ナムジュ著・矢島暁子訳（2021）『ミカンの味』朝日新聞出版
- ・春木育美（2006）『現代韓国と女性』新幹社
- ・林香里編（2019）『足をどかしてくれませんか—メディアは女たちの声を届けているか』亜紀書房
- ・朴澤泰男（2016）『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動』東信堂
- ・山下英愛（2013）『女たちの韓流—韓国ドラマを読み解く』岩波書店

参考映像資料

- ・DVD『82年生まれ、キム・ジョン』（クロックワークス、2019年）